

## 1970年代流しの衰退原因の再考察

宮坂知瀬 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

### 要旨

流しは、明治10年頃、西南戦争後の自由民権運動において演説の役割を担うために生まれた演歌、演歌師を起源とする。街頭に立ち、歌を歌い、歌詞の記された唄本を売っていた。しかし時代や社会情勢の変化とともに、その活動の様相も変化していく。大正、昭和初期ごろ、流しの活動場は街頭ではなく室内へ変化する。集まった人々に唄本を売るのではなく、カフェや酒場などの客に直接話しかけ、営業し、歌を歌うことで対価を得るスタイルを確立した。以降、昭和後期から徐々に数を減らした流しであるが、現代では「平成流し組合」に62名の流しが在籍しており、活動の様子を見て取れる。流しの起源である演歌師については先行研究が多く存在するものの、大正、昭和初期頃より見られる流しの活動様相についての研究はほとんど見られない。流しは大衆に広く浸透している文化であり、当時の大衆音楽を考える上で重要な存在である。本論文では、先行研究で言及される1970年代から始まる流し衰退の原因をより明確にすることを目的とする。

本論文は全2章で構成されている。

第1章では、1970年代流しの先行研究を再調査している。1-1では、先行研究で言及される衰退原因である「カラオケブームの到来」と流し衰退の関係性について整理している。流しとカラオケの持つ要素を比較し、カラオケの主な普及場所に着目して論じている。カラオケブームの到来は、流しの活動の場であるスナックでの需要の減少において一因を認めるが、衰退の直接的な要因とは足りないことを示した。1-2では、先行研究では言及されていないものの、流しと同じ場で広く普及した1970年代の音楽文化と流しを比較している。ジュークボックス、有線放送を、「金銭を支払い曲をリクエストする」という共通のシステムをもつ存在として比較対象とする。ジュークボックス衰退の様子から、衰退と需要の減少が必ずしも一致するわけではない可能性を示唆した。また、有線放送の持つ音楽的な要素を整理し、有線放送は流し衰退の原因では

ないと示している。

第2章では、全19名へのインタビュー記録から流し衰退の原因を調査している。2-1では流しの実際の利用者に対して利用理由に焦点を当てて情報をまとめている。2-2では、流しと同じ空間にいなながらも流しの利用に至らなかった理由に焦点をあてて情報をまとめている。インタビューの情報から、主な利用者層や活動時期について明らかになり、またカラオケ文化との共存の様相が読み取ることができた。

まとめでは、流しの衰退について先行研究との比較を行いながら、新たな視点から衰退原因を捉えることができるようになったと結論付けている。流しが起源より、情勢に合わせ活動形態を変化させている特徴から、流しが再び興隆を始める現在、活動形態の変化を予想すると共に、大衆文化として重要な存在である流しの研究の意義を示している。